

聖書：ダニエル 7：1～28

説教題：人の子のような方が

日時：2015年1月4日

ダニエル書はこの7章からガラッと雰囲気が変わります。これまではダニエルや3人の友だちを巡る出来事が中心に記されていました。しかし7章以降はダニエルが見た幻が記されていて、新約聖書のヨハネの黙示録に相当するような内容になっています。そのため難解と思ってパスしてしまいやすい箇所でしょう。しかし聖書に読む必要のない箇所は一つもありません。ここもまた私たちに豊かな慰めと励ましを与えるために書かれた部分として、私たちは忍耐しつつ読んで行きたいと思います。

時はバビロンの王ベルシャツアルの元年とあります。5章で見たように、ベルシャツアルはバビロンの最後の王ナボニドスの息子で、ナボニドスと共同統治した人です。そのバビロンの最後の王の時代に、ダニエルは寝床で一つの幻を見ます。以下、三つに分けてこの章を見て行きます。

まず記されているのは4頭の大きな獣の幻です。これらの獣は海から上がって来ました。「海」は聖書で危険で得体の知れない場所というイメージを持っています（黙示録21章1節参照）。その海から奇妙で恐ろしい獣たちが上がって来ました。第一のものは獅子のようで鷲の翼をつけていました。ライオンは地上の動物の王者であり、残忍で凶暴な性質を持っています。ワシは空中を滑空する動物の中でやはり力ある恐ろしい存在です。しかしダニエルが見ていると、この獣から翼が抜き取られ、人間のように二本の足で立たされて、人間の心が与えられます。これはどういうことでしょうか。獅子と鷲の組み合わせは、エレミヤ書ではバビロンの王ネブカデネザルを描写するために使われています。その翼が抜き取られ、人間のようになったという部分は、ダニエル書4章で見た、高慢な彼がへりくだらせられ、自分の弱さを自覚させられた出来事を想起させます。ですからおそらくこれはネブカデネザルに代表されるバビロンの王とその国を指すものなのでしょう。第二に現れたのは熊に似た獣です。この獣は横ざまに寝ていて、その口のきばの間には3本の肋骨がありました。なぜ口に肋骨があるのかと思いますが、これは前の獲物の肋骨がきばに挟まっていたということなのでしょう。それに向かってなお「起き上がって、多くの肉を食らえ」との声がかかります。第三に現れたのはヒョウのような獣です。その背には四つの鳥の翼があり、四つの頭がありました。すなわち四方を見渡すことができ、急いで素早く飛んで行くことのできる力があつた。その獣に主権が与えられます。そして四つ目にさらに恐ろ

しい獣が現れます。7節に「それは恐ろしく、ものすごく、非常に強くて、大きな鉄のきばを持っており、食らって、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。これは前に現れたすべての獣と異なっていた」とあります。先の三つは何らかの意味で地上の動物にたとえられていましたが、この第四のものはたとえられないほどのものであった。10本の角があったとありますが、普通、獣の角は2本であるとする、その5倍の力を持つということになります。そして8節に、その角を注意して見ているともう一本の小さな角が出て来て、その角には人間のような目があり、大きなことを語る口があったとあります。おそらくこの目は、この生き物の特別な知性を表し、また口は自らを誇り、自慢する傲慢さを現わしているのでしょう。

このダニエルが見た夢は何を意味しているのでしょうか。後に御使いがこの意味を説き明かしています。17節を見ると、「これら四頭の大きな獣は、地から起こる四人の王である」とあります。また23節には「第四の獣は地に起こる第四の国」とあります。つまりこれらはバビロンをはじめとし、それに続いてこの世の歴史に起こる国々とその王を指していると言えます。注解書を見ると、これら四つの国は順番にバビロン、メディア、ペルシャ、ギリシャのことであるとか、あるいはバビロン、メド・ペルシャ、ギリシャ、ローマを指すなどと記されています。しかしここではこれらが具体的にどの国々を指しているかということには焦点が当てられていません。それらに深入りし過ぎると、かえって大事なメッセージを見失うことにもつながりかねません。この幻がここまでで示していることは何でしょう。それはこの世界の歴史は、このように獣にたとえられる国々が争い、互いを打ち負かし、自らが支配者になろうとする歴史であるということです。それは落ち着いた世界であり、次々に王や国家が現れて天下を取ろうとする。そして単なる繰り返しと言うより、一層悪く、凶暴な方向へ変化している。歴史はこのように進むということです。時間が経てばこの世界は良い方向へ発展するといった甘い夢を描いてはならない。益々末恐ろしい力を持って、この世をわがものにしようとする国家、勢力、運動、力が現れるということです。

しかしダニエルの幻は9節で第二の場面へと突然変化します。地上における絶え間ない争いの世界に代わって、秩序と美に満ちた天の光景が映し出されます。ダニエルが見ていると、いくつかの御座が備えられ、「年を経た方」が座に着かれます。この「年を経た方」とは誰のことでしょうか。それは神のことです。先に地上の歴史における様相を見て来ましたが、この年を経た方はずっとそこにおられた。またこの方の前には静けさがあります。地上は騒がしく、やかましく争い合っていますが、この方は驚いたり、パニックに陥ってはおられません。その御座は火の炎とあります。その車輪

は燃える火で、火の流れがこの方の前から流れ出ていた。「火」は神の臨在を象徴するもので、ここでは特にさばきの火を意味しているでしょう。また幾千のものがこの方に仕え、幾万のものがその前に立っていました。そしてこの方はさばきの座に着いて、いくつかの文書を開かれます。すなわちすべての行ないを記した文書を開いて、正しいさばきを行なわれるということです。そうしてその方の前で起こったこと、それは大きなことを語るあの角を持つ獣が殺され、燃える炎に投げ込まれるということです。2～8 節まであれほど騒ぎ、他を圧倒して高ぶっていたモンスターがあっけなく滅ぼされる。残りの獣も主権を奪われ、さばきに定められます。そして13～14 節には「人の子」の幻が現れます。大きな獣たちが海から上がって来たのと対照的に、この方は天の雲に乗って現れます。すなわちこの方は天的存在、神的存在である。であるにもかかわらず、「人の子のような方」と言われます。すなわち人間のように見える。その方が年を経た方、すなわち神の前に進み、真に世界を治める方として承認されます。この「人の子のような方」が誰かについて、新約聖書を手に行っている今日の私たちにはすぐに分かります。イエス様はご自身のことを「人の子」と表現されました。そしてご自身の再臨の日を指して、「人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのをあなたがたは見るはずですよ」と言われました。この方にこそ、主権と光栄と国が与えられる。その主権は永遠の主権で過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがないと言われています。

8 節までにおいて、獣たちがしたい放題に振る舞っていました。しかしその中の最も強い第四の獣も天の神の前では全く力がないということがここに示されています。第四の獣は、年を経た方についての記述と、人の子のような方の記述の間に挟まれてかすんでしまっています。何の力も発揮できていません。印象付けられるのは、「年を経た方」と「人の子のような方」の圧倒的主権と栄光です。つまり地上の様々な混乱する歴史の中でも、この天の光景を見上げているように！ということではないでしょうか。どんなに地の獣たちが騒ぎ、自らを誇っても、主権を持っているのは神である。その神が承認された人の子のような方を王とする国こそ、永遠に続く国であり、滅びることがないのです。

さてダニエルはこの幻を見て悩み、その幻によって脅かされたとあります。そこで傍らに立つ御使いに説き明かしを願います。15 節以降が第3 の部分です。そこで御使いはこの夢がどういう意味かをまず簡潔に述べています。17～18 節：「これら四頭の大きな獣は、地から起こる四人の王である。しかし、いと高き方の聖徒たちが、国を受け継ぎ、永遠に、その国を保って世々限りなく続く。」 これこそ、この章の幻の要約

です。幻の意味はここにはっきり説明されています。

しかしダニエルは第四の獣のことが心にかかって、もっとこれについて良く知りたいと思ったのでしょう。その獣が他とどう違うのか、19～20 節に再度繰り返して述べられています。そして 21 節には、この第四の獣から生え出た新しい角が聖徒たちに戦いを挑んで彼らに打ち勝ったとあります。しかし 22 節にそれはいつまでもではないことが記されます。ついに年を経た方、すなわち神が最終的なさばきをなさる日が来る。そうして聖徒たちが最終的な国を受け継ぐ時がついに到来する。

このことについて御使いは改めて 23～27 節で説明します。ここから分かることは、この第 4 の国は、地上の歴史の最後の局面に現れる最も強大な勢力を示しているものだろうということです。それまでとは比べられないような脅威的存在として現れる。そしてそこから「10 人の王」という表現で象徴される様々な分子が現れますが、最後に最も強力な王が現れる。3 人の王を打ち倒すとあるような分裂抗争のプロセスを経て決定的な最後の一人が現れて来るのです。神により頼む民にとっては大変な時が来る。25 節後半にあるように、「聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手に乗ねられる」。「ひと時とふた時と半時」とは、ある期間を指しているとするのが良いと思います。しかし「ゆだねられる」と言われているように、聖徒たちを委ねたのは神です。ここでも主権者は神です。そうした後に、26～27 節にある通り、さばきが行なわれます。最後に立つ王は滅ぼされ、国と主権と天下の国々の権威はいと高き方の聖徒である民に与えられます。ここでは王と民が一つと見られており、具体的には人の子のような方の最終的な王権が確立することによって、その民も主権と光栄にあずかるということでしょう。

このようなダニエルの幻は何を語るもののでしょうか。当時の民に対してこれはまだまだ神の民が苦しむ時は続くということの意味したでしょう。一つの獣だけでも恐ろしいのに、次々に恐ろしい獣が現れます。そして第四の国とそこから出て来る角による恐ろしい時代が来ます。当時ダニエルたちは、バビロンの最後の時代に生きていました。間もなく時代が変わり、メド・ペルシャの時代になります。バビロン捕囚は終わりとなり、ペルシャの王クロスによってエルサレムへの帰還許可も出るようになります。しかしだからと言って終わりではない。困難な時代はまだ続く。ダニエルがこの幻を見てひどくおびえ、顔色が変わったと最後の節にあるのも当然です。しかし究極的には恐れる必要がありません。この幻の中心メッセージは四つの獣がどんなに恐ろしいかということよりも最終的勝利は主なる神の御手にあるということであるからです。確かに厳しい時代は続きます。しかしそのただ中で、9～14 節の光景こそを

いつも見上げているべきである。

そしてこれは今日の私たちにとっても同じでしょう。世界の歴史はどんどん良い方向へ向かうのではありません。創世記 6 章に「人の心に思い計ることがみな、いつも悪いことだけに傾く」とあります。そのような罪の力はどんどん大きくなり、益々自らを誇り、神格化し、破壊的な行動に出る国家、権力、勢力、運動等が現れる。私たちはその中で翻弄されそうになるでしょう。しかし主権は神にあります。ついには人の子のような方が天の雲に乗って来られます。人の子であるイエス様はすでに地上に来られ、十字架に至る生涯をもって悪の力に決定的に勝利されました。そして今やご自身に信頼するどんな者をも救い出す権威を勝ち取って、父なる神の右に坐し、すべてを支配しておられます。そこから栄光の雲に乗って、御国を最終的に打ち立てる王として来られると約束しておられます。それまで色々な苦難があるかもしれません。最高度に反抗する、目を持ち、大きな口を持つ角が現れ、ほしいままに振る舞うかもしれません。しかしそれはひと時とふた時と半時の間だけです。そのただ中で私たちはこの幻を心にしっかりと収めていたい。9～14 節で見た世界があるということを見上げつつ。最終的に人の子のような方が天の雲に乗って来られます。この方に主権と光栄と国が与えられて、その聖徒たちもまたその光栄にあずかります。その国こそ永遠に続く国であり、過ぎ去ることがなく、滅びることがない国なのです。